# フランスの「ビズ学校」における異年齢学級の実践

## －「フレネ教育」の導入の視点からの考察を中心に－

坂　本　明　美[1)]

本稿は，フランスのマイエンヌ（Mayenne）県，ボーモン＝ピエ＝ドゥ＝ブフ（Beaumont-Pied-de-Boeuf）という農村にある公立小学校「ビズ学校（Ecole Bizu）」の異年齢学級において，筆者が2009年３月12日（木）～３月13日（金）の二日間観察した内容を中心に，同校の教育実践について考察するものである。「ビズ学校」は，全校に一学級しかない単級学校であり，筆者の訪問時の2009年３月には，CE1～CM2［小学校第２～５学年］の子どもたち26名が一つのクラスで学んでいた。「ビズ学校」においては，担任教師であり校長を兼務しているエルベ・ムレ（Hervé MOULLÉ）が，長年コンピュータの導入という独自性を発揮しながら，「フレネ教育」の「フレネ技術」を部分的に導入した教育実践を展開している。また，教室には，「フレネ技術」と並んで「フレネ教育」の重要な要素となる「学習材」も，豊富に備えられている。本稿では，セーヌ＝エ＝マルヌ（Seine-et-Marne）県のモーホガール（Mauregard）にある「モーホガール初等学校（Ecole Primaire de Mauregard）」の異年齢学級における教育実践との比較も部分的に交えながら，「ビズ学校」の教育実践の特徴について考察していく。

キーワード：異年齢学級，「フレネ教育」，「フレネ技術」，「学習材」，フランス，単級学校

### はじめに

本稿は，フランスの農村にある公立小学校で，全校に学級が一つしかない単級学校の異年齢学級において，「フレネ技術」を部分的に導入している「ビズ学校」の教育実践について考察するものである。

我が国では，主に「へき地」といわれる地域や農山村部などの小規模校に，「複式学級」が存在する。それらの「複式学級」における「複式授業」の一般的な教育方法は，次のような形である。二つの異なる学年の子どもたちが一つの同じ教室において，空間として二つの場に分かれ，それぞれの学年ごとで二つの授業が同時進行される。教師は，二つの学年の間で「わたり」を行い，「直接指導」と「間接指導」（時には「両間接指導」）を行いながら，二つの授業を行う。

一方，我が国の「複式授業」とは異なる授業展開を行なっている異年齢学級における実践として，フランスの異年齢学級において「フレネ教育」を導入している学級の実践がある。そこでは，子どもたちはどのように学び，教師はどのようにかかわっているのだろうか。特に，全校に１クラスしかない単級学校の異年齢学級では，「フレネ教育」がどのように導入され，どのような教育実践が行なわれているのだろうか。さらに，フランスの農村にある異年齢学級として，どのような特徴をもった教育実践が展開されているのだろうか。その一端を知るために，本稿では，筆者が2009年３月に訪問したフランスの「ビズ学校」の実践を取り上げ，考察を行う。

「フレネ教育」に関する先行研究として，「異年齢学級」に焦点を当てた先行研究は，管見の限り，筆者の５つの研究[1)]がある。

一方，「フレネ教育」についての研究というわけではないが，2010年10月９日（土）の日本教育方法学会第46回大会（於　国士舘大学）において，筆者と同じ「自由研究１」の会場で発表された赤星まゆみの発表「フランスの新教育運動と実験学校⑵　―異学年混成学級の教育実践―」[2)]は，特に，フランスにおける学級編成，学校規模，学級規模，異学年混成学級などについて参考になった。同じく，「フレネ教育」についての研究ではないが，藤井穂高の論文「フランスの小学校配置制度と「農村学校」」[3)]は，特に，フランスにおける「公立小学校の基本データ」，「「農村学校」と広域学

１）山形大学地域教育文化学部附属教職研究総合センター

校統合」について参考になり，本稿でも引用させていただいている。

なお，本稿では比較を行うために，筆者が2009年３月９日（月）～３月11日（水）に訪問した，セーヌ＝エ＝マルヌ（Seine-et-Marne）県のモーホガール（Mauregard）にある「モーホガール初等学校（Ecole Primaire de Mauregard）」の実践も部分的に扱う。「モーホガール初等学校」の実践については，『山形大学紀要（教育科学）』第15巻，第２号，2011年２月発行，pp. 11～35（105～129），に掲載された拙稿[4]において論じているので，本稿と合わせてお読みいただければ幸いである。

ところで，「ビズ学校」における調査は，平成18年度～平成20年度　独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究（スタートアップ））の交付を受けて行なった，次の研究の一部として実施したものである。「フランスにおける「フレネ技術」を導入した異年齢学級と，日本の複式学級との比較」（課題番号18830011）研究代表者：坂本明美（平成19年度の途中で育児休業等による中断）

この科研費の調査として，フランスにおいて「フレネ技術」を導入して実践を行なっている「異年齢学級」で，筆者が訪問した学校は，下記の①～④の４校である[5]。

①　マリー・キュリー学校（Ecole Marie Curie）：セーヌ＝サン＝ドニ（Seine-Saint-Denis）県，ボビニー（Bobigny）

②　フレネ学校（Ecole Freinet）：アルプ＝マリティーム（Alpes Maritimes）県，ヴァンス（Vence）

③　モーホガール初等学校：セーヌ＝エ＝マルヌ県，モーホガール

④　ビズ学校（Ecole Bizu）：マイエンヌ（Mayenne）県，ボーモン＝ピエ＝ドゥ＝ブフ（Beaumont-Pied-de-Boeuf）

さらに，フランスにおいては上記の４校以外に，比較し参考にするために，次の⑤，⑥の２校においても観察を行なった。

⑤　Ｌ学校（公立小学校）：ジロンド（Gironde）県，「フレネ教育」を実践に直接的には導入していない異年齢学級（CP～CM1［小学校第１～４学年］の子どもたちが一つのクラスで学んでいる全校１クラスの単級学校）

⑥　Ｏ小学校（公立小学校）：ジロンド県，「フレネ教育」を実践に導入していない，公立小学校のCE1［小学校第２学年］の単式学級

なお，本稿は，2010年10月９日（土）に日本教育方法学会第46回大会（於　国士舘大学）の「自由研究１」で発表した内容[6]の一部分について，特に「ビズ学校」に関する部分に焦点を当て，さらに考察を深め，同学会発表では扱わなかった内容も盛り込み，資料も今回新たに翻訳して付け足すなどして，発展させたものである。発表当日，会場において貴重なご意見をいただいた方々に，この場をお借りして御礼申し上げます。

## １．「フレネ教育」

本稿で取り上げる「ビズ学校」は，「フレネ教育（la Pédagogie Freinet）」の「フレネ技術（les techniques Freinet）」を部分的に導入している。そこでまず，「フレネ教育」[7]について簡単に述べておこう。

フランスの教育者セレスタン・フレネ（Célestin FREINET：1896～1966）は，第一次世界大戦に従軍し，肺に弾丸を受けて負傷する。強い反戦の思いを持って，フレネは1920年にバール・スュル・ルーという村の学校に教師として赴任する。彼は，教師による知識伝達型の教育を批判し，子どもたちの自由な表現とコミュニケーション，子どもの興味を土台に据えた教育，子どもたちが自ら「仕事（le travail）」を組織していく教育，子どもたち一人ひとりの学習リズムに対応した教育，子どもたちの自治による学級や学校の組織化，個性化と協同化（協働化），などを追究した。

フレネは，教師を中心とした協同的な教育運動を展開しながら，「フレネ技術」とよばれる諸技術を形成していくと同時に，多様な「学習材」を教師たちとともに協同的に試行錯誤しながら開発していった。「フレネ技術」とは，具体的に，「学校印刷」，「自由テクスト」，「学校新聞」，「学校間通信」，「学校協同組合」，「コンフェランス［自由研究の発表］」，「仕事の計画」などである。「フレネ教育」における「学習材」とは，子どもが主体的に学ぶためのものであり，例えば次のようなものがある。子どもたち一人ひとりの学習リズムの多様性に応えるもの（分野ごと，レベルごとに発行されており，「自己採点カード」のように，一人ひとりの進度に合わせて個別学習を行うためのカードや，小冊子のシリーズ，など）。子どもが興味・関心を持った時にすぐに自分で調べられるように準備された資料（『学習文庫（Bibliothèque de Travail：略して“BT（ベーテー）”）』と呼ばれる子ども向けのテーマ別資料小冊子のシリーズ，資料カード，など）。このような「フレネ技術」と「学習材」が，「フレネ教育」を支え

ている。

## 2．「ビズ学校」の概要　～フランスの「農村学校」における「市町村間広域行政学校統合」～

筆者は，2009年３月12日（木）～３月13日（金）の二日間，マイエンヌ県，ボーモン＝ピエ＝ドゥ＝ブフにある「ビズ学校」において観察を行なった。「ビズ学校」は農村にある小規模校で，学校の窓から見える風景としては，広大な緑の農地が果てしなく広がっている。「ビズ学校」という名称は，ジャン＝クロード・フーニエー（Jean-Claude Fournier）によって創られた漫画の登場人物「ビズ」という名称からきており，その「ビズ」という登場人物が同校のマスコットになっている。担任教師はエルベ・ムレ（Hervé MOULLÉ）氏［以下，「エルベ」とする］で，彼が校長を兼務している。「ビズ学校」のホームページに2010年７月に掲載された文章によると，エルベは，同校で「フレネ教育」を実践して17年になるという[8]。

「ビズ学校」は，全校に１学級しかない単級学校で，筆者の訪問時の2009年３月には，CE1～CM2［小学校第２～５学年］の子どもたちが一つのクラスで学んでいた。2009年３月時点の学年ごとの児童数の内訳は，次の通りであった。CE1［小学校第２学年］が６名，CE2［小学校第３学年］が８名，CM1［小学校第４学年］が７名，CM2［小学校第５学年］が５名で，合計26名。特徴的なことは，次のように，ル・ビュレ（Le Buret），プレオー（Préaux），ボーモン（Beaumont）という三つの市町村の間で，「市町村間広域行政学校統合（Regroupement Pédagogique Intercommunal）」[9]［以下，RPIと省略する］を行なっていることである。以下，2009年３月に学校に貼ってあった掲示物，及び，エルベから聴いた内容をもとに，各学校について「対象とする子どもたちの学年……学校名，市町村名，児童数」という順に記しておく。

①　保育学校の年少組・年中組……ユージェーヌ・ルブレイ学校（Ecole Eugène Leblay），ル・ビュレ，17～18名

②　年長組・CP［小学校第１学年］……公立学校，プレオー，18名

③　CE1［小学校第２学年］・CE2［小学校第３学年］・CM1［小学校第４学年］・CM2［小学校第５学年］……ビズ学校，ボーモン＝ピエ＝ドゥ＝ブフ，26名

ここで，以下，藤井の記述をもとに，フランスの「農村学校」における「市町村間広域行政学校統合［RPI］」について少し詳しくみておこう。藤井によると，RPIには次の２種類あるという。「１つは，完全な統合であり，単級学校を集めて，１つの敷地内に１つの学校を設置するものである。もう１つは，学習期ごとの統合であり，各市町村には学校が残るが，特定の学習期の児童のみを収容する。児童から見ると，学習期に応じて通う学校が異なることになる。」[10] 藤井の記述によると，前者は「集中型」，後者は「分散型」と分類される。この分類でいえば，「ビズ学校」は「分散型」に相当する。また，RPIは，「2001年の時点では4768校あり，そのうち，3755校（79％）が「分散型」であり，1013校（21％）が「集中型」である」という。従って，「ビズ学校」のような「分散型」が，RPIの約８割を占めていることになる。さらに，その通学区域の広がりをみると，「分散型」では平均2.83市町村を，「集中型」では3.43市町村を含んでいるという[11]。また，藤井は次のようにも述べている。「［……］1999年では，RPIは合計で13061学級を有しており，小学校の全学級数の8.45％を占めている。また，RPIの平均学級数は2.99学級で，１学級当たりの平均児童数は20.2人である。この年の小学校全体での平均児童数は22.3人であるから学級規模に大きな違いはないといえる。」[12]

筆者が住んでいる山形県内の小規模校においても，学校の統廃合が進んでいるが，上記の分類でいうと「集中型」である。フランスにおいては，「ビズ学校」のような「分散型」が約８割を占めていることは，我が国との大きな相違点であろう。

## 3．「ビズ学校」における教育実践

以上みてきたように，三つの市町村の間において，「市町村間広域行政学校統合」が実施されている「農村学校」の一校としての「ビズ学校」であるが，同校ではどのような教育実践が展開されているのだろうか。二日間の訪問であり，しかも，筆者の訪問に合わせて特別な内容が多く準備されていたり，学校行事に向けての活動も含まれていたりしたため，同校の日常的な教育実践の全体像を理解することは困難ではあるが，可能な限り同校の特徴を考察していきたいと思う。

### (1)　コンピュータの活用

同校の大きな特徴は，コンピュータを積極的に活用していることである。担任教師エルベの教育実践歴は特筆に値し，1980年代にいち早くコンピュータを導入している。エルベ本人から聴いた話によると，当時フ

ランス全土の学校においても，まだ３～４校くらいしかコンピュータを導入していなかった時代であったそうである。2009年３月の筆者の訪問時には，教室には全部で８台のコンピュータが置いてあり，子どもたちが活用していた。教室前方の黒板の近くには，クラス全体で画面を見ることができるような，新しいデスクトップのパソコンが一台置いてあった。また，教室の壁面に向かって，ノートパソコンが４台とデスクトップのパソコンが２台置いてあり，後方にもデスクトップのパソコンが１台置いてあった。教室の見取り図を【図１】で示しておく。

子どもたちは，学習のさまざまな場面において，インターネットで検索を行なう。観察時には，Google Earthで筆者の日本（山形）の自宅付近を検索したり，翻訳ツールで日本語とフランス語の翻訳を確認したりしていた。子どもたちは，調べたいことがあるとすぐにコンピュータのある所に移動して検索していた。その様子から，彼らがコンピュータを日常的に使いこなしていることが容易に伝わってきた。

さらに，【図１】では省略しているが，教室の隣にもう一つ，広いスペースを備えた教室があり，図書とともに，やや古いがまだ充分使えるデスクトップのパソコンが13台置いてあった。筆者が観察した時，この隣の教室の広いスペースを使って，子どもたちがダンスの練習をしたり，クラス全体でそのダンスの発表を見て感想を言い合ったり，演劇の練習をしたりしていた。

ところで，「ビズ学校」は，2009年に「農村部の小学校デジタル化計画（Ecoles numériques rurales）」[13]の一校に選ばれた。小島によると，「国民教育省は，農村部の小学校におけるデジタル化計画として，2009年度（９月～）に農村部にある小学校5,000校に対し，コンピュータの補充や電子黒板などの情報化資源の拡充を図る予定」であり，「約5,000万ユーロ（約65億円）が予算として充てられている」という。この「農村部の小学校デジタル化計画」は，「2009年３月末に発表されたもので，5,000万ユーロの予算を投じ，農村部の小学校の教育におけるICTの活用を推進するものである」。小島の記述によると，詳細については次の通りである。「希望するコミューン（市町村）に対して，学校の教育のための情報資源及び国民教育省が指定するコンピュータや電子黒板などの情報化機器の購入に対する補助金が交付される。政府は，こうした計画により，全国の児童に対して，情報化に関する同等な機会を与え，教育におけるICT環境を整備したいとしている。」また，「同計画の対象となるのは，2,000人未満のコミューンにある小学校5,000校である」[14]。

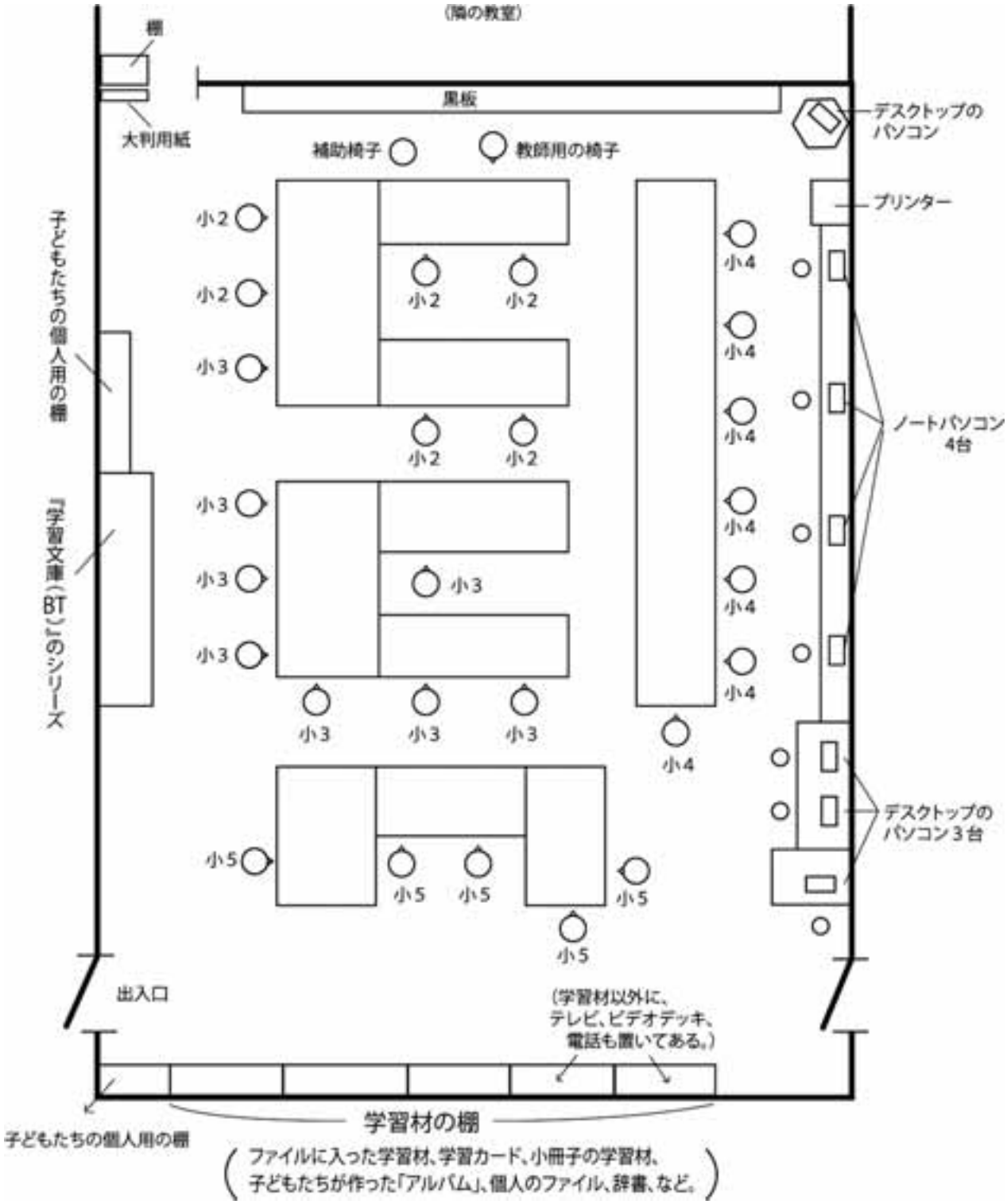
一方，筆者がインターネットで検索した情報によると，2009年11月30日に，「農村部の小学校のデジタル化計画」のために，追加の1,700万ユーロが与えられることが発表され，当初予定されていた5,000校の代わりに，6,700校に至った[15]。

小さな「農村学校」の「ビズ学校」ではあるが，フランスにおいて，以前から既に他の学校にはみられないほどコンピュータの活用が盛んであり，「農村部の小学校のデジタル化計画」の一校となったことによって，今後もさらに「ICTの活用」は積極的に推進されるであろう。

### ⑵　「フレネ教育」の「学習材」の重要性

教室はやや古く狭く感じたが，豊富な「学習材」が備えられており，子どもたちの学びを支えていた。ここで「学習材」として「　」を付したのは，「フレネ教育」の「学習材」は，「フレネ技術」と同様に特別な意味を持つからであり，「フレネ技術」と「学習材」の二大要素が「フレネ教育」の実践を基盤で支えているからである。「ビズ学校」において筆者が観察した範囲内では，その「学習材」の多くが「フレネ教育」のシリーズとして発行されているものであった。

例えば，『学習文庫（BT）』と呼ばれる子ども向けのテーマ別資料小冊子のシリーズがある。これは，教室にある棚に番号で分類・整理されていた。子どもがあるテーマについて興味・関心を持ち，「知りたい」と思った時に，その興味・関心に即座に応えてくれる「学習材」である。同じく「フレネ教育」のシリーズとして発行されている「学習材」で，個別学習を進める上で，子どもたちの多様な学習リズムに対応するために発行されている「学習材」のシリーズがある。例えば，算数の計算問題など，分野ごと，レベル（段階）ごとに種類を分けて発行されているもので，個人で所有して使用する小冊子の「学習材」のシリーズ。同じく個別学習を進めるための「学習材」として，ファイルに綴じて学級で共同使用して使うタイプの「学習材」のシリーズ。同じく個別学習を進めるための「学習材」で，フランス語の綴り，動詞の活用，応用問題，読み方（lecture）の「自己採点カード」などの，学習カードのシリーズ。これらをはじめとする多種多様な「学習材」が教室には備えられていた。筆者が観察した時は，子どもたちは，上述した個別学習のための，個人所有の小冊子のシリーズの「学習材」をよく使っていた。




【図１】「ビズ学校」の教室の見取り図（2009年３月訪問時）

子どもたちの学びと学校生活の拠点となっている教室。ここでは省略したが，隣にも教室がある。［作成：坂本明美］

ところで，比較を行うために筆者が2009年３月に訪問したジロンド県の公立小学校のＬ学校は，CP～CM1［小学校第１～４学年］の子どもたち合計19名が１つのクラスで学んでいる単級学校であった。この異年齢学級では，「フレネ教育」を実践に直接的には導入していなかった。このＬ学校の担任教師［校長兼務］は，毎日４つの学年に合わせた学習材を準備するのが本当に大変だ，と嘆いていた。一方，「ビズ学校」では，上述したように，「フレネ教育」のシリーズとして発行されている「学習材」で，多様なレベルに対応できる「学習材」が活用されているので，「学習材」の準備という面では，教師の負担はかなり軽減される。

「ビズ学校」における「学習材」で，さらに筆者が注目したものが，「フレネ教育」の実践として，子どもたちが製作した「アルバム（les albums）」［＝手作りの本：筆者註］である。「ビズ学校」では，後述するように，子どもたちが興味・関心のあるテーマについて探究学習を進め，その成果を「アルバム」にまとめる。そして，完成した「アルバム」の内容を皆の前で発表することが，「コンフェランス［自由研究の発表］」として実践されていた。これらの「アルバム」は多数蓄積され，教室の棚に，分野ごとに番号で分類・整理され保存されていた。「アルバム」は，個人［あるいは共同研究］の学びの成果が作品化されたものであり，その作品が，他の子どもたちの学びのための「学習材」として貢献することになる。従って，ただ単に「保存」されているのではなく，クラスの共有財産となっている。

### ⑶　学年ごとにまとまる座席の配置

座席は，【図１】で示したように，大まかに捉えると，子どもたちが学年ごとにほぼまとまって座る配置になっていたことが特徴的であった。これは，筆者が2009年３月に訪問した「モーホガール初等学校」の小学生クラスにおける座席の配置と，大きく異なる点であった。というのも，「モーホガール初等学校」の小学生クラスでは，できるだけ異学年の子ども同士が同じグループになるように配慮された机の配置になっていたからである。比較するために，「モーホガール初等学校」の小学生クラスの子どもたちが日常的に使用する教室の見取り図［2009年３月訪問時］を，【図２】[16]で掲載しておく。

ここで，「モーホガール初等学校」について簡単に記しておこう。同校は，小学生クラスが１クラス，幼児クラスが１クラス，合計２クラスである。参観時（2009年３月）の児童数は次の通りである。小学生クラスは合計20名で，CP［小学校第１学年］が４名，CE1［小学校第２学年］が４名，CE2［小学校第３学年］が５名，CM1［小学校第４学年］が３名，CM2［小学校第５学年］が４名である。幼児クラスは合計13名で，２～３歳が３名，３～４歳が５名，４～５歳が１名，５～６歳が４名である。なお，月曜日の午前中に，障がいを持った８歳の女の子が１名，幼児クラスに通っている。以上のように，小学生クラスも幼児クラスも，ともに異年齢学級である[17]。

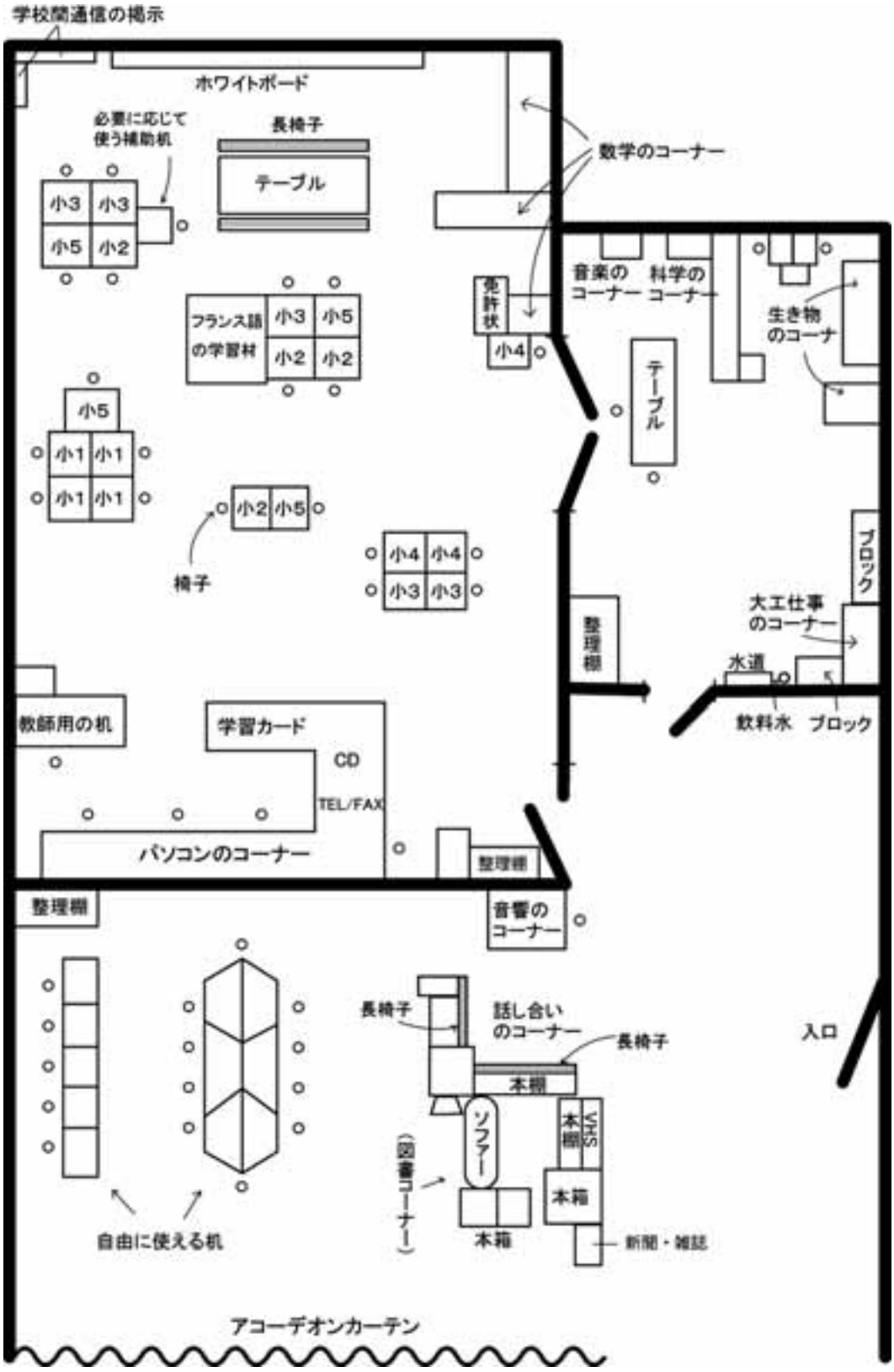
「ビズ学校」に話は戻るが，「ビズ学校」では，「集会（la réunion）」で話し合いをする時は，クラス全員が輪になって着席するような座席の配置に変えていた。

### ⑷　書くこと（écrire）の重視

「ビズ学校」では「書くこと」を非常に重視しており，筆者の観察時も，そのことが窺えた。担任教師エルベが「ビズ学校」における実践について紹介した論稿で，「フレネ教育」の教師向けの雑誌『新しい教育者（*Le Nouvel Educateur*）』no. 148，2003年４月号に掲載されている論稿[18]によると，「書くこと」の具体的な実践として，「朝の文章（phrase du matin）」，「新聞（journal）」，「アルバム（album）」，「単語探し（chasse aux mots）」，「カード（fiche）」が挙げられている。ここでは，「朝の文章」と「単語探し」について述べたい。

同論稿によると，朝，子どもたちはしばしば，自分の創作を書くことから一日を始めるという。これが「朝の文章」と呼ばれる実践であり，筆者の訪問時も観察することができた。筆者が観察した内容，及び，担任教師エルベや子どもたちが説明してくれた内容によると，各自がまず，ブロックノート［メモ帳のようなノート］に書きたい内容を自由に表現して書き，教師に添削してもらう。そのテクストを，子どもたちがコンピュータで入力する。これらのテクストは，「ビズ学校」の「学校新聞」『Le petit journal de Bizu』に掲載される。同校ではホームページを作成しており，子どもたちのテクストを活字にした「学校新聞」『Le petit journal de Bizu』は，ホームページ上でも掲載されるとともに，メールアドレスを登録している読者にもメールで配信される。

「単語探し」については，2009年９月15日付けの同校の「学校新聞」『Le petit journal de Bizu』に，「単語探しの使用法」についての文章が掲載されていたので，その記述[19]をもとに，以下述べていく。




【図２】「モーホガール初等学校」の部分的な見取り図　(2009年３月訪問時)

小学生クラスの子どもたちが日常的に使用している教室

［坂本明美「フランスの公立小学校の異年齢学級において「フレネ技術」を導入した，フィリップ・ラミの教育実践　―「マリー・キュリー学校」と「モーホガール初等学校」における実践を中心に―」『山形大学紀要（教育科学）』第15巻，第２号，2011年２月発行，p. 23（117）］［作成：坂本明美］

「単語探し」は，子どもたちにとって，語彙の検索，単語の綴りの学習，記憶［＝暗記］のために役立つ。

①　月曜日，クラスで一つのテーマを選ぶ。

②　月曜日の夜，家で，一人ひとりがテーマに関連する単語を探し，学習ノートに書いてくる。

③　火曜日，クラスで，一人ひとりが辞書や「チェッカー（le vérificateur）」で単語を探し，ページ数と段の数を自分のノートに書き留める。

④　次に，子どもたちは綴りを言いながら教師に単語を書き取らせる。コンピュータの書記担当の子どもが，テクスト処理をしながら単語を入力している間，教師は単語を板書する。他の子どもたちは，ノートに単語を書き写す。

⑤　黒板に単語や表現が30個あるいは50個並んだ時，リストをストップし，それらを読む。

⑥　時には，何人かができるだけ速く読み，［読むのに］かかった時間をはかる。

⑦　また，二つのグループに分かれて，リストをコンピュータでできるだけ速く入力するコンテストを行うこともあり得る。

⑧　リストは一人ひとりに印刷され，ノートに貼られる。

⑨　水曜日には，木曜日に向けて，単語を読みながら，それらをノートに書きながら覚える。難しそうな単語を探して，それを何回も書く。

⑩　木曜日の朝，教師は子どもたちに単語を書き取らせ，子どもたちは，「書き取り（ディクテ）（dictée）」のプリントにそれらの単語を書く。時には，ある子どもが別の子どもに書き取らせる。時には，「自己書き取り（un autodictée）」になる。次に，一人ひとりが確かめをして，それからリストを見ながら訂正する。

⑪　間違って書いた単語は，改めて覚えなければならない。

以上が「単語探し」の実践方法である。実際に，筆者が同校を訪問した一日目の2009年３月12日（木），「書き取り」をしている場面を観察することができた。この時は，「５文字」［＝例えば，「chien（犬）」のような５文字の単語：筆者註］というテーマで「単語探し」を行なったまとめとして，上記のプロセスの⑩に相当する「書き取り」を行なっていた。子どもたちは，大きい学年の子どもたちと小さい学年の子どもたちとで，二つのグループに分かれて，時間差を設けて「書き取り」を行なっていた。この日に観察し得た限りでは，CE2～CM2［小学校第３～５学年］の子どもたちと，CE1［小学校第２学年］の子どもたちとで，二つのグループに分かれて「書き取り」を行なっているようであった。大きい学年の子どもたちも小さい学年の子どもたちも共通して学習している単語であっても，両者では書くスピードが異なる。そのため，座席はそのままにして，二つのグループに分かれて，最初に教師が大きい子どもたちに単語を読み上げて「書き取り」をしている間，小さい子どもたちは各自で，計算問題など算数の小冊子の「学習材」に取り組んでいた。「書き取り」では，教師が単語を読み上げ，子どもたちがそれらの単語を耳で聴いて，「書き取り」のプリントにその単語を記入していた。大きい学年の子どもたちが一通り「書き取り」を終えて各自で確かめをした後，自己採点をしている間に，教師は小さい学年の子どもたちのグループに単語を読み上げて「書き取り」を行なっていた。大きい子どもたちは自己採点が終わると，計算問題の小冊子の「学習材」に取り組んでいた。

### ⑸　個別学習への対応

「フレネ技術」の一つに「仕事の計画［計画表］（le plan du travail）」がある。教師によってその実践方法や「計画表」の内容も異なるが，「フレネ教育」における「仕事の計画」は，子どもたち一人ひとりが自分の学習や活動について計画を立て，その「計画表」をもとに，学習や活動の自己運営を行なうものである。例えば，「フレネ教育」の創始者であるセレスタン・フレネが1935年に開校し，現在でも存続している南フランスのヴァンスにある「フレネ学校」の小学校高学年クラスを例に挙げてみよう。筆者が参観した時は，担任教師がカルメン先生の時代であったが，次のように実践されていた。子どもたちは，決められた期間についての自分の「仕事の計画」を自分で立てる。クラスや学校全体で取り組む学習や活動もあるので，子どもたちはそれらの内容も含めて学校での活動全体を見通しながら，自分の計画を立てる。その計画に従って，自分で学習や活動を進めていく。彼らは学校に到着すると，すぐに各自の「計画表」に基づいた学習にとりかかる。従って，この「仕事の計画［計画表］」が無ければ，子どもたちの学習や活動がうまく機能しなくなると言っても過言ではない。それほど「仕事の計画［計画表］」は，子どもたちにとって重要な役割を果たしていた。そして，ある決められた期間の終わりには，自己評価と，クラスでの相互評価を行ない，保護者や教師にコメントを「計画表」に記入してもらっていた。このように，子どもたち自身で自己選択・自己決

定して，学習や活動を自主運営していくことは，「フレネ教育」において大切な要素となっている。

しかしながら，「ビズ学校」では，この「計画表」を実践に導入していなかった。このことについて担任のエルベに尋ねると，「『計画表』を使おうとしたけれども，子どもたちはうまく使いこなせなかった。うまく機能しなかったので不要である。」と答えた。ただし，「個別学習」は実践されている。例えば，算数の計算問題に取り組む場合であっても，「フレネ教育」のシリーズとして発行されている個別学習のための「学習材」が，子どもたち一人ひとりの学習進度の多様性に応えられるようになっているため，一人ひとりの学習リズムに合わせて，それぞれ異なる計算問題の内容に取り組むことが可能となる。実際に，「ビズ学校」には，このような個別学習のための「フレネ教育」のシリーズの「学習材」が豊かに備わっていることは，既に述べた通りである。また，2010年10月11日付けの同校の「学校新聞」『Le petit journal de Bizu』には，二人の大学生が同校を訪問した時の様子について，子どもたちが共同で書いたテクストが掲載されている。そのテクストの中に，当日の午前中の学習内容の一つとして，「CE2-CM1［小学校第３・４学年］の個別学習」という記述がある。また，その記述の次には，「CM2［小学校第５学年］の評価」という記述もみられる[20]。当日の様子については観察していないため明らかではないが，この「学校新聞」のテクストの内容からも，同校で「個別学習」や何らかの「評価」の活動が実践に導入されていることがわかる。

なお，筆者の観察時は，筆者の訪問に合わせた特別な内容［子どもたちが筆者へプレゼントしてくれたテクストの朗読，日本語の紹介と日本についての質疑応答，ある男の子による日本の写真の紹介］や，直前に迫った演劇の大会に向けての練習などに多くの時間がとられてしまい，観察した範囲内では，クラス全体で取り組む学習や活動内容が多かった。

### ⑹ 「コンフェランス［自由研究の発表］」(la conférence)

「フレネ教育」では，子どもが自分の興味・関心のあるテーマについて，調べ学習・探究学習を行ない，その成果を発表する実践を「コンフェランス」と呼んでいる。「コンフェランス［自由研究の発表］」は，個人の学びの成果とその表現を「共同体」で共有する場となる。

一方，「ビズ学校」では，上述したように，子どもが自分の興味・関心のあるテーマについて探究し，その内容についてまとめた「アルバム」［＝手作りの本：筆者註］を，クラスの皆の前で読みながら発表することが，「コンフェランス［自由研究の発表］」として実践されている。「アルバム」の実践方法や製作方法は，そのクラスによって異なるが，「ビズ学校」では，［ファイルに綴じて使用する］薄く透明な柔らかいクリヤーポケットの一枚一枚の中に１ページずつ入れ，すべてのページのクリヤーポケットをまとめて，左側の綴じ穴の部分を数箇所ひもで結んで綴じて製作している。

筆者の訪問時，CM2［小学校第５学年］の女の子が「猫　リュリュ」というテーマで，自分が飼っている猫について製作した「アルバム」の内容を発表した。いよいよ発表が始まるという時，発表者の女の子は，教室全体が静かになるのをしばらく待ち，皆の聴く態勢ができた頃合いを見計らって，発表し始めた。聴き手の子どもたちの手もとには，「質問　～コンフェランス中の学習カード～」と書かれた質問用紙が既に配布されていた。この質問用紙の上部には，「○○○［発表者の女の子の名前：筆者註］による≪リュリュ≫」というタイトルが書いてあり，発表内容に関する質問が５問書いてあった。発表者の女の子は，自分が製作した「アルバム」の内容を読みながら，適宜，補足説明を加えながら発表していた。自分が描いたイラストをクラスの皆に向かって見せたり，教室前方にあるパソコンの画面で写真を提示したり，聴き手にわかりやすいように工夫しながら発表していた。

発表終了後すぐに，クラス全員が順番に感想を発表したり，質問をしたりしていた。この様子を観察して感じたことは，他者の発表について，ていねいに，なおかつ率直に，自分の言葉でコメントをする子どもたちが多いことである。ある５年生の男の子は，次のように発言していた。

「あるページには，短い文章が書いてあって，ページの真ん中にとても小さな絵（イラスト）が描いてあったけど，余白の部分がたくさんあったのが気になりました。それから，申し訳ないんだけど，質問用紙の最初の質問が，少し［簡単すぎて：筆者註］ばかげている感じがしました。なぜならば，質問が『猫の名前は何ですか？』で，コンフェランスのタイトルが「リュリュ」だから……。」

このような率直な意見が多かったため，このクラスの子どもたち同士の間には，お互いに自分の考えを他者に安心して表現し合える信頼関係が成立している，と筆者は捉えた。

全員がコメントを発表し終えると，質問用紙に書か

れた５つの質問について，１問ずつ，子どもたちが答えを発表し，クラス全体で確認しながら，担任教師が答えを板書していった。このように，聴き手は発表を単に聴くだけではなく，内容をしっかり理解しながら集中して聴くことが求められる。なお，最近の同校の「学校新聞」『Le petit journal de Bizu』には，発表された「アルバム」の内容と質問用紙の質問項目も掲載されている。従って，同校の「学校新聞」をメールで受信する世界の人々も，子どもたちの「コンフェランス［自由研究の発表］」の具体的な内容を，即座に知ることができる。

⑺　「集会（la réunion）」

2009年３月にフランスで行なった調査の際に，「ビズ学校」における「集会」と，「モーホガール初等学校」の小学生クラスにおける「集会」も観察した。そこで，比較するために，二校の「集会」の様子について取り上げたい。

①　「ビズ学校」における「集会」

「ビズ学校」では，「集会」は一週間に一回開かれる。ただし，急いで話し合う必要がある時は，すぐに話し合う。子どもたちは，「集会」で話し合いたいことがあると，随時，教室の左側前方に置かれた大判用紙に，自分の名前を添えて自由に記入する【図１を参照】。この大判用紙に書かれた内容に基づいて，議長を担当する子どもが「集会」を進行する。

2010年３月13日（金），午後４時過ぎから「集会」が開かれた。議長が，大判用紙に書かれた内容の中から順番に，まず一つ目の内容を読み上げる。その内容について発言したい人は最初に挙手をする。書記がその人たちの名前を，発言者リストの名簿に「／」の印でチェックしていき，議長はチェックされた人たち一人ひとりの名前を「○○○［名前］，（手を）降ろして」と言いながら，手を降ろさせる。そして，発言者リストの名簿にチェックされた子どもたちを，議長が順番に指名し，指名された子どもが発言する。発言が終わると，書記はさきほどの発言者リストの名簿の「／」の上に重ねて，一本の線を逆向きにチェックを入れて，「×」印になるように記入していく。従って，この発言者リストを見れば，その「集会」において誰が挙手し，誰がまだ発言が終わっていないか，ということがわかるようになっている。また，過去に遡って統計としてみれば，誰が発言が多くて誰が少ないか，ということも一目でわかる。以上のような形式で，一つひとつの議題についての話し合いが進められていった。自由な発言は認められず，挙手による発言と，議長の進行に従うことが厳格に求められ，硬い雰囲気の中で話し合いが進められていた。この日の議題として話し合われた内容としては，例えば，「議長に従ってくれない」，「誰もドアを閉めてくれない」という議題についてなどがあった。「集会」では，子どもたちの年齢差，学年差を越えて，一人ひとりが「共同体」の一員として発言し，より良い学校生活を求めて話し合いに参加していた。

なお，この日の「集会」の途中で，二つの地方新聞の新聞記者二名が，筆者の「ビズ学校」訪問について新聞記事[21]にするために，学校へ取材に来られた。そのため，「集会」の話し合いが中断してしまい，通常よりも話し合う議題の数が少なくなってしまったようである。一方，新聞記者の訪問の際には，筆者だけではなく，子どもたちと担任教師もインタビューを受けたが，子どもたちは，自分たちが日々取り組んでいる「フレネ教育」の実践について，何をどのように取り組んでいるのか，的確に答えていた。筆者は，ヴァンスの「フレネ学校」，「モーホガール初等学校」など，「フレネ教育」を実践に導入している学級をいくつか訪問してきたが，どの学級の子どもたちも共通して，「ビズ学校」の子どもたちのように，自分たちが学んでいること，活動していることについて，訪問客に対してきちんと説明できていた。

ところで，2010年10月19日付けの同校の「学校新聞」『Le petit journal de Bizu』の内容の一部は，「私たちの生活の規則」（2010年10月18日版）であった[22]。この「私たちの生活の規則」（2010年10月18日版）を翻訳したものを，【表】として掲載しておく。この中で，「ビズ学校の子どもたちによって提案され，議論され，可決された生活の規則」とあるように，学校における規則も，「集会」において子どもたち自身で話し合って決めている。

②　「モーホガール初等学校」における「集会」

2009年３月９日（月）～11日（水）に訪問した「モーホガール初等学校」の小学生クラスでは，「集会」は３月９日（月）と10日（火）の二日間とも実践されていた。［なお，３月11日（水）は，学習に困難を抱えている子どもたちだけが登校し，午前９時～11時の２時間のみ，「個別支援［補習］（l'aide personnalisée）」が行われていた。］「集会」では，子どもたちと教師とが，教室の前方にあるテーブルの周りに集まって座り，発

**【表】ビズ学校の「私たちの生活の規則」（2010年10月18日版）［翻訳：坂本明美］**
**（*Le petit journal de Bizu*, Ecole Bizu, mardi 19 octobre 2010 - 2より）**

ビズ学校　53290　ボーモン＝ピエ＝ドゥ＝ブフ
私たちの生活の規則

子どもの名と姓：　　2010年10月18日

ビズ学校の子どもたちによって提案され、議論され、可決された生活の規則

## 教室で

○規則 **no.1**
私は、学校にきちんとしてきます。そして、きれいにして帰るように気を付けます。

○規則 **no.2**
朝、静かに入り、服をコート掛けにかけます。上履きを履き、くつをしまいます。かばんを空にして閉め、片付けます。教室に落ち着いて入ります。筆入れ、メモ帳など、自分の物を準備します。

○規則 **no.3**
廊下で騒ぎませんし、ドアを閉めます。差し錠に触りません。

○規則 **no.4**
「**私はささやきます。**」あるいは、「**静かに**」という掲示がある時は、それに従います。

○規則 **no.5**
学校で暴力は禁じられています。言葉においても、行為においても、ボールを使った乱暴な遊びもです。私は、他の人たちのことを大切にします。なぜならば、私は、他の人たちが自分のことを大切にしてほしい、と思うからです。ののしったり、盗んだり、たたいたり、うそをついたりしません。他の人たちの考えを受け入れます……。

○規則 **no.6**
芝刈り機を傷めないように、芝生の上に石を置きません。

○規則 **no.7**
遊びの領域：
―足で遊ぶボールは、芝生の上と広い校庭で許可されていますが、［屋根のある］雨天体操場、庭、小さな校庭では禁止されています。
―竹馬は、小さな校庭においてだけしか許可されていません。
―トイレと小屋の中では、遊びは禁止されています。

○規則 **no.8**
休憩時間の終わりに、自分が出した物［道具］を片付けます。

○規則 **no.9**
学校の物と一人ひとりの物を大切にします。

○規則 **no.10**
私の資料を、自分のファイルか、自分のノートの中に収めます。

○規則 **no.11**
学校から外に出ません。また、大人に許可を求めることなく、校舎の後ろに行きません。

○規則 **no.12**
もしも他の人たちが望まないのならば、自分がしている遊びを、他の人たちに強制しません。私は、自分の遊びに誰かを受け入れる義務はありません。

○規則 **no.13**
学校で、チューインガムを噛みません。

○規則 **no.14**
児童の間の助け合いは、ささやくのであれば、良いことです。それは、平常テストと評価の間は、禁止されています。

○規則 **no.15**
休憩時間を、トイレに行くために利用します。

○規則 **no.16**
ドアを乱暴に閉めません。

○規則 **no.17**
もしも私が家によく忘れ物をするならば、必要な時に使うことができるように、それを学校に置いておかなければならないでしょう。

○規則 **no.18**
夕方、自分の席を片付け、何も忘れ物をしないで、自分の持ち物を準備します。上履きをしまい、コート掛けにかけた自分の服を取ります。

○規則 **no.19**
お金と貴重品（読み物MP3、［コンピュータの］コンソール［＝操作卓］、電話、宝石）は、持って来ないように勧められます。そして、それらの安全は、学校によって保障されることができません。

○規則 **no.20**
物の交換はしないように勧められます。なぜならば、それによって問題が生じ得るからです。お金と引替えにしての交換は禁止されています。

## 食堂で

○規則 **no.21**
もしも必要ならば、食堂に入る前にトイレに行きます。

○規則 **no.22**
衛生状態を良くするために、石鹸で手を洗います。そして、ハンドペーパー

を一枚だけ使います。
○規則 **no.23**
食堂に入ったら、すぐに、静かに着席します。
○規則 **no.24**
無駄にしないように、食べ物で遊びません。
○規則 **no.25**
大きすぎる声で話しません。なぜならば、響きわたるからです。
○規則 **no.26**
食堂係の人が私を呼ぶ時以外は、食事中、テーブルを離れません。

**トイレで**

○規則 **no.27**
場所をきれいに保ちます。
○規則 **no.28**
トイレに走って入りません。
○規則 **no.29**
wc のドアを閉めます。
○規則 **no.30**
休憩時間にトイレの中で遊びません。
○規則 **no.31**
トイレットペーパーも、ハンドペーパーも、無駄に使いません。
○規則 **no.32**
トイレの水を流します。
○規則 **no.33**
トイレに行った後で手を洗います。

**スクールバスで**

私たちの提案に基づき、SIVOS はスクールバスのための規約を適用するように決めました。
○規則 **no.34**
運転手に従う。
○規則 **no.35**
立ち上がってはいけない。
○規則 **no.36**
どんなやり方であっても、運転手の邪魔をしてはならない。
○規則 **no.37**
物をいためてはいけない。
○規則 **no.38**
かばんを足元に置く。特に背中の後ろに置いてはいけない。
○規則 **no.39**
スクールバスをきれいに保つ。食べてはならない。つば［痰］を吐いてはならない。床に何も捨ててはならない。

**庭で**

○規則 **no.40**
植え込み地の上を歩いてはいけない。
○規則 **no.41**
教師の許可なく、果物や野菜を摘み取ったり、食べたりしてはならない。

**評価**

次の数を数えます…
－緑⇒
－オレンジ⇒
－赤⇒

**処罰**

学校で：
行方不明になったボールのため、あまりにも乱暴な遊びや、忘れられた物のため、侮辱や暴力の場合に、処罰が適用できます。処罰は、「会議の集会（réunion de Conseil）」において、協議され、決定されます。
－クラスの［皆の］前で謝る。
－ある日、ボールを取り上げられる。
－グループのために働く。
－生活の規則を書く。
－コンピュータを取り上げられる［＝使えなくなる］。
－資料を複写する。
スクールバスで：
－注意
－カードの一時的な没収
－カードの最終的な没収

子どものサイン：　　保護者のサイン：　　教師のサイン：

**色の意味**　緑：よくできる。　－オレンジ：難しい。　－赤：できない。

表したい子どもが挙手して発表する。自分の学びや活動の成果としての作品［「自由テクスト」の発表も含める］などを紹介したり，子ども向けに発行されている新聞の記事の内容を紹介したり，個人の計画やクラスの計画について話し合ったりしていた。「集会」は，個人の学びや情報などを「共同体」で交流し，共有し合う時間となっていた。

具体的に，2010年３月10日（火）の午前中に開かれた「集会」の内容は，次の通りであった。

・２名の男の子が順番に，自分が書いたテクストを読み上げる。
・女の子が，その日の午後，友だちと二人で「イル・フロッタン」というお菓子を作ってクラスの皆にふるまう予定であることを報告し，そのため，「イル・フロッタン」が嫌いな人を確認する。担任教師フィリップの助言により，「イル・フロッタン」というお菓子について，発表者の女の子がまず説明する。その女の子は，続いて，筆者が日

本のお土産として贈ったけん玉を披露した。
・筆者が紙に書いてあげた日本語を，女の子が皆に提示して紹介する。
・女の子が，図形に関するプリントの内容からヒントを得て，自分で作った切り紙の作品を紹介する。
・男の子が，子ども向けの新聞『Mon Quotidien』の記事の内容を紹介する。
・レゴブロックの作品を作った男の子が，自分から挙手して発言しないため，担任教師フィリップが彼に発言をするように促す。⇒その男の子が，自分が作ったレゴブロックの作品を紹介する。
・担任教師フィリップが，韓国人からプレゼントされた，折り紙に関する本を紹介する。
・女の子が，日本語の文字を粘土で作って表現した作品を紹介する。

以上の内容であった。教室前方にあるテーブルに備え付けられている長椅子に座りきれない子どもは，近くの机の上に座っている。「議長」はおらず，発言が終わった人が，手［指］を挙げて発言の機会を待っている人の中から次の発表者を指名する。教師も「共同体」の一員として，手［指］を挙げて発言をしていた。全体的に柔らかい雰囲気の中で「集会」が進められていた。

同校のホームページに掲載されている内容［2010年10月5日に検索した内容］によると，スポーツがある金曜日を除いて，午前と午後，紹介したいことを発表する「集会」を開いているという。また，以前は，「議長」が「集会」を運営していたが，現在では「議長」が必要なくなり，上述したように，発表者が次の発表者を指名するようになったという［http://ww3.ac-creteil.fr/Ecoles/77/ece-mauregard/notre_classe.htm］。また，2010年4月7日付けの共同で書かれた「自由テクスト」の内容によると，「集会（des réunions）」は「話すため」であり，「会議（des conseils）」は「クラスで物事を決めるため」に開かれるという［http://ww3.ac-creteil.fr/Ecoles/77/ece-mauregard/dans_la_classe.htm］。従って，「集会」と「会議」とで内容を分けて実践していることがわかる。なお，2009年3月の訪問時には，同校の「会議」は観察できなかった。また，筆者が2007年3月に担任教師フィリップの前任校の「マリー・キュリー学校（Ecole Marie Curie）」の彼の教室を観察した時は，「会議」で協議するような内容も「集会」の中で話し合っている，とフィリップは説明していた[23]。当然のことではあるが，同じ教師の実践であっても，担任するクラスの状況や子どもたちの状況によって，実践内容は変わっていく，ということを改めて認識した。

以上みてきたように，「ビズ学校」と「モーホガール初等学校」の2校における「集会」の運営や進め方，内容，雰囲気が異なっており，それぞれのクラスの個性や，実践における特徴が浮き彫りになっていた。

## おわりに

藤井によると，フランスにおいて2001年の時点では，「市町村間広域行政学校統合（RPI）」が行われる場合，約8割が「分散型」であったという[24]。本稿で取り上げた「ビズ学校」も，フランスの農村において，三つの市町村間で「分散型」の「市町村間広域行政学校統合（RPI）」を行なっている学校の一つであった。筆者の訪問時，「ビズ学校」では，小学校第2～5学年の子どもたち26名が一つのクラスで学んでいた。即ち，全校に1クラスしかない単級学校の異年齢学級であった。このような「農村学校」の小規模校である「ビズ学校」の異年齢学級において，「フレネ技術」が部分的に教育実践に導入されていた。

「ビズ学校」では，担任教師エルベの独自性により，フランスにおいていち早く教室にコンピュータを導入していたことも，特筆に値する。実際に筆者の訪問時に出会った子どもたちも，コンピュータに十分慣れ親しんでいた。しかし，筆者が注目したいことは，単に子どもたちがコンピュータに慣れ親しみ，インターネットで検索機能などを容易に使いこなしていることではない。彼らが，ホームページやメールを媒介に，「学校新聞」を中心として，子どもたち自身の自由な表現や，彼ら自身の学びの成果を世界に発信し続け，目に見えないさまざまな人々とつながり合い，交流を続けているということである。その子どもたちの自由な表現を支えるためにも重要になってくると思われるが，同校では，特に「書くこと」を重視しているように窺えた。

「ビズ学校」の実践を「フレネ教育」の導入の視点から考察すると，上述したように，子どもたちの自由な表現をもとに製作される「学校新聞」，子どもたちが自分の興味・関心のあるテーマについて探究し，その成果を発表する「コンフェランス［自由研究の発表］」，子どもたちと教師とが共同体の一員として，学校や学級における生活などについて協議し合う「集会」など，いくつかの「フレネ技術」が導入されていた。しかし

ながら，「仕事の計画［計画表］」は導入されていなかった。そのため，子どもたちが「計画表」を媒介に，自分で学習や活動の計画を立てて，学習の自己運営をしていく姿は見られなかった。それは，「仕事の計画［計画表］」を導入しようと試みた担任教師エルベが，子どもたちの実態を捉え，必要性を感じないと判断したためであった。

しかしながら，教室には「フレネ教育」のシリーズとして発行された「学習材」を中心に，豊富な「学習材」が備えられており，子どもたち一人ひとりの学習リズムや進度に合わせて，各自で個別学習を進めていくことができるようになっていた。さまざまな学年の子どもたちが学んでいる異年齢学級において，これらの「学習材」は，子どもたちの多様性に応えるために不可欠であり，「ビズ学校」においても重要な役割を果たしていた。さらに，子どもたちの興味・関心に基づいて探究的な学びを進めることができるような『学習文庫（BT)』のシリーズなどの「学習材」も備えられていた。そして，子どもたちのたくさんの手作りの「アルバム」も，分野ごとに番号で分類・整理され，保存・蓄積されており，これらの「アルバム」が，クラスにおける共有財産として，子どもたちの「学習材」の一つとして貢献していた。

一方，「モーホガール初等学校」との比較・考察から，座席の配置の仕方の違い，「集会」の進め方や内容の違いも浮き彫りになった。さらに，「仕事の計画［計画表］」の導入の有無も，教育実践として大きな相違点となるだろう。「フレネ技術」とよばれる諸技術のどの部分をどのように導入し，それをどのようにクラスで子どもたちと実践していくか，ということによっても，教育実践は異なってくる。そこでは，単に「技術」の問題だけはなく，その教師の考え方や，教師の独自性も深くかかわってくる。

## 注

1）フランスにおいて「フレネ技術」を導入した教育実践について，筆者がこれまで「異年齢学級」に焦点を当てて研究を行なったものは，(a)〜(e)である。そのうち，(b)〜(e)の４つの研究は，本稿の研究と同じ科研費の助成を受けて行なった研究成果の一部である。

(a)　坂本明美「「異年齢学級」における「協同的な教育」の実践　―フランスの公立小学校におけるフィリップ・ラミ学級（Cycle3）を通して―」山形大学教職研究総合センター『山形大学教職・教育実践研究』第１号，2006年，pp. 1〜10

(b)　坂本明美「フレネ学校における教育実践　―「異年齢学級」に着目して―」産業教育研究連盟編集，農山漁村文化協会発行，『技術教室』2008年２月号，No. 667，pp. 54〜59

(c)　坂本明美「フランスにおける「フレネ技術」を導入した異年齢学級の教育実践　〜「異質性」と「多様性」を尊重した「共同体」の一員としての子ども〜」フランス教育学会第25回大会（於　宇都宮大学）自由研究発表，2007年９月17日

(d)　坂本明美「フランスの異年齢学級において「フレネ技術」を導入した教育実践　―「モーホガール初等学校」と「ビズ学校」を中心に―」日本教育方法学会第46回大会（於　国士舘大学），「自由研究１」，2010年10月９日

(e)　坂本明美「フランスの公立小学校の異年齢学級において「フレネ技術」を導入した，フィリップ・ラミの教育実践　―「マリー・キュリー学校」と「モーホガール初等学校」における実践を中心に―」『山形大学紀要（教育科学)』第15巻，第２号，2011年２月発行，pp. 11〜35（105〜129）

2）赤星まゆみ「フランスの新教育運動と実験学校(2)　―異学年混成学級の教育実践―」日本教育方法学会第46回大会（於　国士舘大学），「自由研究１」，2010年10月９日

3）藤井穂高「フランスの小学校配置制度と「農村学校」」，フランスにおける排除と包摂研究会（研究代表者：古沢常雄）「フランスにおける社会的排除のメカニズムと学校教育の再構築」(平成19〜21年度科研費補助金報告書)，平成22年３月，pp. 1〜12

4）坂本明美「フランスの公立小学校の異年齢学級において「フレネ技術」を導入した，フィリップ・ラミの教育実践　―「マリー・キュリー学校」と「モーホガール初等学校」における実践を中心に―」前掲

5）注の１）を参照のこと。

6）坂本明美「フランスの異年齢学級において「フレネ技術」を導入した教育実践　―「モーホガール初等学校」と「ビズ学校」を中心に―」日本教育方法学会第46回大会（於　国士舘大学），「自由研究１」，2010年10月９日（当日配布資料）

7）「フレネ教育」については，例えば，次のような文献を参照のこと。セレスタン・フレネ著，石川慶子／若狭蔵之助訳『フランスの現代学校』明治図書，1979年。セレスタン・フレネ著，宮ヶ谷徳三訳『手

仕事を学校へ』黎明書房，1984年。セレスタン・フレネ，宮ヶ谷徳三『仕事の教育』明治図書，1986年。

8）http://www.ecolebizu.org/（ホームページの画面の27 juillet 2010の“Compte rendu de la visite de la RIDEF”をクリックして開いた文章より）

9）本稿においては，“regroupement pédagogique intercommunal”の訳語として，藤井穂高による「市町村間広域行政学校統合」という訳語をお借りした。藤井穂高「フランスの小学校配置制度と「農村学校」」，前掲，特にｐ.8の記述より。

10）藤井穂高「フランスの小学校配置制度と「農村学校」」，前掲，ｐ.8

11）藤井穂高，前掲，ｐ.9

12）藤井穂高，前掲，ｐ.9

13）“Ecoles numériques rurales”の訳語として，「農村部の小学校デジタル化計画」は，小島佳子による訳語をお借りした。小島佳子「フランス」，文部科学省『諸外国の教育動向　2009年度版』明石書店，2010年，ｐ.119

14）“Ecoles numériques rurales”についての小島の記述は，次の文献による。小島佳子「フランス」，文部科学省『諸外国の教育動向　2009年度版』明石書店，2010年，pp. 119～120

15）http://www.educnet.education.fr/primaire/ecole-numerique-rurale

16）【図２】は坂本が作成した図であり，坂本の次の拙稿のｐ.23（117）で掲載された図である。坂本明美「フランスの公立小学校の異年齢学級において「フレネ技術」を導入した，フィリップ・ラミの教育実践　―「マリー・キュリー学校」と「モーホガール初等学校」における実践を中心に―」『山形大学紀要（教育科学）』第15巻，第２号，2011年２月発行，pp. 11～35（105～129）

17）坂本明美「フランスの公立小学校の異年齢学級において「フレネ技術」を導入した，フィリップ・ラミの教育実践　―「マリー・キュリー学校」と「モーホガール初等学校」における実践を中心に―」前掲，特にpp. 21～34（115～128）

18）Hervé Moullé “La cl@sse numérique”, *Le Nouvel Educateur*, no. 148, Avril 2003, PEMF, pp. 9-12　特に，pp. 10-11

19）*Le petit journal de Bizu*, Ecole Bizu, mardi 15 septembre 2009

20）*Le petit journal de Bizu*, Ecole Bizu, lundi 11 octobre 2010

21）次の２社の新聞記事に，筆者の「ビズ学校」訪問に関する記事が掲載されている。①“Akémi Sakamoto en mission de recherche à l'école Bizu”, (BEAUMONT-PIED-DE-BOEUF), *Le Haut Anjou*, 20 mars 2009　②“Une enseignante japonaise en classe à Beaumont”, (Beaumont-Pied-de-Boeuf), *Les Nouvelles de Sablé*, 19 mars 2009

22）*Le petit journal de Bizu*, Ecole Bizu, mardi 19 octobre 2010 - 2

23）坂本明美「フランスにおける「フレネ技術」を導入した異年齢学級の教育実践　～「異質性」と「多様性」を尊重した「共同体」の一員としての子ども～」フランス教育学会第25回大会（於　宇都宮大学）自由研究発表，2007年９月17日（当日配布資料）

24）藤井穂高，前掲，ｐ.9

【付記】本稿は，平成18年度～平成20年度　独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究（スタートアップ））の交付を受けて行なった研究成果の一部である。「フランスにおける「フレネ技術」を導入した異年齢学級と，日本の複式学級との比較」（課題番号18830011）研究代表者：坂本明美（平成19年度の途中で育児休業等による一時中断）